

発行者：服部敏男
和泉市議会議員
小田町586-1-1-512
TEL：0725-46-4011



公明党

はつとり市政瓦版

予算審査特別委員会閉会

予算審査特別委員会が、三月八日（火）から十四日（月）までの日程で開かれ、平成二十八年度和泉市各会計予算案の審議を行ないました。

私も、予算委員の一人として委員会にて、各部門に

わたり二十数件の質問を行いました。

主な質問項目は、人材育成事業の中の職員資格取得報償費について、市民文化ホールを今後について、マインナンバー交付事業について、コミュニティバス運行負担金について、障がい者自立支援地域生活支援事業の中から手話通訳登録員研修について、同じく基幹相談支援センター委託料について、生活保護受給者就労支援について、胃がん検診に内視鏡検査を加えることについて、インフルエンザ予防接種助成について、（仮称）和泉府中駅西線整備事業の進捗について、繩和橋橋梁架け替え事業について、学校教育支援事業について、小中一貫校校内ＬAN構築事業について、学校安全緊急対策委託料、小学校施設維持管理事業のトイし改修工事費について、留守家庭児童会事業の中で留守家庭児童会教室（フレハブ）の利用について、池上曾根遺跡史跡指定四十周年記念式典についてなど二十数点にわたり、質疑を行いました。質問内容は議会のホームページにて録画を見ることができます。ぜひ一度ご覧ください。

東日本大震災から五年、 市議会で黙とうを行う

予算委員会の三日目である三月十一日は、東日本大震災から五年を迎えた。和泉市議会でも、犠牲者に哀悼の意を込め、委員会を中断して議場にて一分間の黙とうを行いました。心からご冥福をお祈り申し上げるとともに、一日も早い復興を願います。

市政運営方針について大綱質疑（抜粋）



【問】平成二十七年度に子ども子育て支援新制度がスタートし、市内施設の定員がどれだけ定員増になつたのか？また今後の待機児童対策については、不足しているといわれる保育士確保の施策は？

【答】二四一名の定員増になつた。引き続き待機児童解消を図るべく認定こども園に向けた施設整備補助等を行う。途中入所に臨時保育士を採用できるよう、潜在保育士の復職前の実技研修先として受け入れ準備をしており、また保育士養成施設に対し卒業者に求人登録を呼びかけるよう働きかけを行う。

【要望】待機児童解消のため加速度的な対策を進めていただきたい

【問】乳がん検診の自己負担額無料化また、後期高齢者の介護予防を目的とした歯科健診実施の周知方法は

【答】乳がん検診は、ホームページの他、がん検診重点受診勧奨対象者に個別通知や若い世代には乳幼児健康診査に来られる保護者への周知を行う。

歯科健診は、保健センター・保健福祉センターからの通知や、ホームページの掲載、歯科医院へのポスター掲示により周知する。

【問】平成二十八年度は、市において犯罪発生件数の多い区域への防犯カメラ設置に取り組むとのことだが、設置場所は、どのように選定するのか？

【答】犯罪発生に関する情報については、当市を管轄する和泉警察署で把握しておりますので、同署と連携を密にし、防犯効果が高い場所などについて助言を受けながら、設置場所を選定してまいります。

【要望】今後、通学路の安全のためにも、設置を進めてほしい

和泉市議会議員一般選挙は9月11日に投票

和泉市選挙管理委員会は、3月2日（水曜日）任期満了（平成28年9月22日）に伴う、和泉市議会議員一般選挙の日程を9月4日（日曜日）告示、9月11日（日曜日）投票に決定しました。

立候補予定者説明会は、7月27日（水曜日）午後1時30分からで、場所は和泉市コミュニティセンター1階大集会室（和泉市府中町2-7-5）で行います。

投票場所は市内58か所で、投票時間は午前7時から午後8時までです。

平成28年3月2日現在の選挙人名簿登録者数は、男69,907人、女76,285人、計146,192人です。

開票は当日開票で、午後9時15分から和泉市立市民体育館（和泉市府中町4-20-3）で行う予定です。

（和泉市ホームページより）

主張 公明党 5年の記録 置き去りにすまい、一人として

東日本大震災から5年。

被災地ではきょう一日、亡き人を偲んで、遺族や友人、知人らが深い祈りを捧げることだろう。「その死を無駄にしない」「必ずや復興を成し遂げる」との決意とともに。

その思いを全身で受け止め、私たちも後に續きたい。あの日を忘れない、決して支援の手を緩めない、これからも被災地とともにあり続ける。改めて自らにそう誓いつつ。

震災5年の節目を刻んだ被災現場の風景をどう伝えればいいのだろう。

がれきの山はとうに消え、その跡には新しいまちが生まれつつある。鉄道、道路などのインフラもほぼ整い、災害公営住宅の建設ラッシュも続く。すでに新居で再出発を果たした被災者も少なくない。膨大な国費を投入した「集中復興期間」（～15年度）の5年間、「ハードの復興」は確実に進んだと、ひとまずは及第点を付けていいだろう。

問題は「ソフトの復興」だ。皮肉にもハード面の復興が進めば進むほど、ソフト面の取り組みは後回しになっているように見える。仮設住宅での孤独死やアルコール、ギャンブル依存の被災者が年を追って増えている現実が、そのことを端的に物語っている。

こんなことがあった。妻も子も全てを失い、今は単身で仮設に暮らす年配者を取材した時のことだ。極度の鬱と診断され、仕事に就くことも叶わないその男性は、能面のような表情でぼそりと呟いた。「復興なんか進まなくていい」。衝撃的な言葉だった。

言動の背景にあったのは、被災のショックに加えてもう一つ、日に日に広がる復興格差への、恨みにも似た怯えと焦りだったろう。

生活再建を果たして仮設を出ていく人と、そうでない人。「フクシマ」をめぐる内と外の温度差。こうした形で二極分化が進み、弱者がますます弱者となっている。

次の5年、政治はこの一点、すなわち「心の復興」「人間の復興」への取り組みを格段に強化する必要がある。

今なお避難者17万人超、仮設入居者6万人弱。このうちの一人として置き去りにはしない。その覚悟も深く、公明党は被災者の心の襞にまで寄り添い、支援の汗を流し続けていくことを約束したい。